

囚人のものがたり

「このお話は、昔むかし
のことでしょうか……？」

これは三池炭鉱に、昔むかしにあったお話
です。

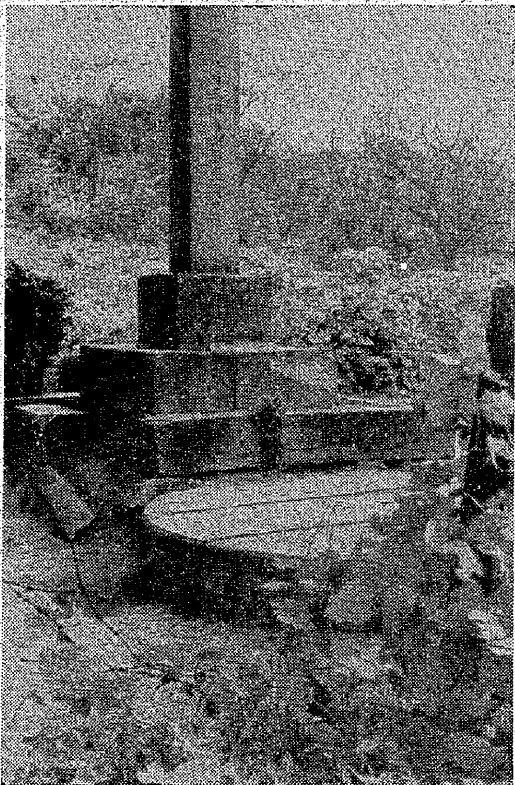
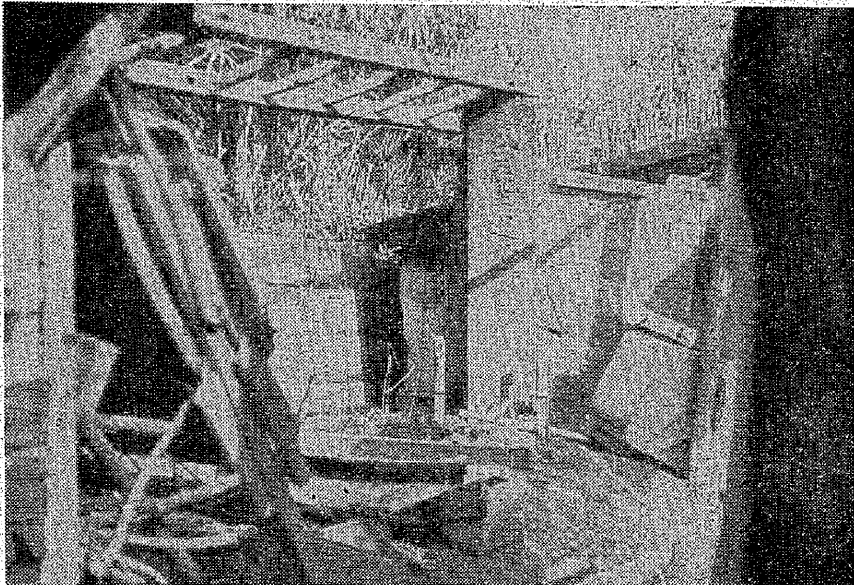
三池炭鉱で囚人が使役されはじめたのは、
いまから約百年ほど前、わが国の炭鉱が官営とな
りました明治六年以来のこと。それが再び官営か
ら民営にかわり、三井が政府から払い下げをうけ
て新しく経営に乗り出してゆく明治二十二年一月
一日以降も、囚人労働はそのまま引き継がれてゆ
きました。

はじめた五十人に過ぎなかった三池炭鉱の
囚人の数は、その経営が三井の手に移るころにな
りますと、おどろくなく二千人四百四十人にふく
れあがってあります。そのころ三池炭鉱に働いて
いた全ての労働者の数が三千三百三人に過ぎませ
んでしたから、なんとそのころの三池炭鉱労働者の
うちほぼ七割を占める労働力が、囚人だったとい
うことになるのです。

ではそのころの炭鉱で、囚人たちはいったいど
んな仕事をさせられていたのでしょうか。
はじめ彼らの仕事は、炭鉱の仕事のうちで一番
つらい排水作業だったようでした。

ところが明治十一年ころから、坑内にすえつけ
られるようになり、また蒸気ポンプで排水できる
ようになり、それ以後彼らは、採炭夫などとい
う、炭鉱における仕事の中でも一番基本的な
部門にまで動かされるようになっていきました。
しかし明治の中期から下期にかけては、三池
炭鉱に働く採炭夫の三分の二以上を、囚人採炭夫
が占めたと申しますから、おどろくではありません
か。

坑口ではじめて、足から重い鎖をはずしてもら
った彼らは、二十何人かずつケージに乗って坑底
に降ります。坑底に降りるとそこは、監守が
あてつけられる鉄格子の門をくぐって、彼らのため
に設けられている切羽に向かい、坑道の奥に湧え
てゆくのです。彼らの姿が奥に消えると、監守
の手によって鉄格子の門はガチャリと冷たく閉ざ
されるのです。



写真上は、市内竜湖瀬の民
家の庭先にある「合葬之
碑」。明治25年建立のもの
で「三池監獄在監人死者」とある。
中は大砂社宅上の古井戸。
囚人の遺体が投げこまれた。
その上に、獄吏一同が建て
た「解達塔」がある。
下はノ浦囚人墓前で、保
存会の手により営まれた供
養祭。地下に眠る囚人のど
う哭を聞く思いだった。



といっしょにさがって働いていたという良民労働
者の一人で、いまも元気に生きていらっしゃるが、
こんな話をしてくれました。
「ある一人の囚人から、キラキラ光る五十銭銀
貨ばかりを、きくつと、マスですくって見せられ
たときばかりが、さすがにあいた口がふさがらん
じゃったんですよ。そのころの五十銭銀貨といえ
ば、それを一枚もって町に出れば、活動写真が見
られたうえに、酒もしたかのんで、悠々と遊べ
た金じゃったからですよ」
「バクちも盛んでした。中には金(キン)でつく
ったサイコロさえ、彼らはもっていました。」

暗い、官原炭の坑底の、鉄格子の向こう側の、
囚人労働者の世界ではまた、すさまじい恋愛も生
まれていました。

恋愛といえども、彼らの職場に女がある
わけではなし、男が男に心を燃やしたのでした。
ひとりの家がすくなくならぬとくくられておしま
した。ちゃんと、戸主の名前がかかっていた。
門の戸を開けますと、中には思ひ思いに炭壁を
くり抜いて部屋ができていました。そしてそこは
は、タバコ(と申してもききませんでした)、
菓子、砂糖、酒(もちろんおどろく)など地上の
世間にあるものではないものはありませんでした。
中には、お金を山ほど貯めていた囚人もいま
した。これについて、官原炭にそのころ囚人たち
にもいじらしいほどでした。

これまで女房にしていた相手の男を寝とられた
というので、採炭夫をしていた一人の囚人が、種
取りの囚人を出会いがしらに、いきなり炭塊をも
って、たつたと打ちでなぐり殺したこともあれ
ば、また「坊主」「坊主」といわれた囚人が
自分の女房だった相手の囚人を刑を終え、放免さ
れましたことからすっかり前途を悲観して、坑底
のポンプ座の天井から首をつって死んでいたり……
それこそ囚人たちの恋愛は、はげしい、命がけ
のものでしたのです。

囚人たちはまた、強制された厳しいくらしの中
で生きていくうちに、私たちの思いもおよぼはな
い知恵や技術を身につけていました。しかもそれらを一
瞬のうちに、素早くやり終る器用さと共に。

手にもった松の杭を、一人の囚人が、五寸釘
でもって一心不乱に打っていました。何をやるの
かと思っていれば、そのうちに一つの立派な桶が
できあがりました。しかも、カッポリとかぶさる
フタつきな桶が。

それは、だれの目にもカンナをかけて仕上げた
どしと思われぬほど、光沢さえ発していました
が、その桶こそ、ほかでもなくドブ桶をしてむ
貴重な器だったのです。彼は毎日昼食を食べのこ
しては、その中に投げこみ、わが家の片隅に保存
しておきます。すると、ひときは熱い坑内のこと
が思い出されます。

やがて器の中の残飯が手ごころに溶解して、あの素
晴らしいドブ桶にかわってゆくのでした。

そんな囚人たちの間で、ときとして恐ろしいこ
とが起きました。

あるときのこと、一般良民の女坑夫がケージを
で、囚人たちが送りこまれる鉄格子の前を通り
かかりました。

すると、鉄格子の向う側から一人の囚人が手ま
ねきをしたのです。ですから女坑夫の一人は思わ
ずそれにひかれながら、不用意に鉄格子の側に寄
っていったのでした。それと見えたかんだ囚人は
さつと鉄格子の間から手を差し出して、女坑夫の
片腕をガバツとつかむと、こんどは強力にものを
いわせて、女坑夫の肩からその腕を、おそろしい
ことにひっこめてしまったではありませんか。

あまりのことに女坑夫は気が失って倒れてしま
いました。それなのに、彼女の肩からその片腕を
ひっこめた囚人はひっこめた腕をかついで、
みんなの間を踊りまわってよろこんだといいま
す。自分たちを耐え難くしめつける、目に見えな
い圧制者に対する怒りや反抗心を、彼はあんなに
こんなにおそろしい、あままた手段で爆発させ
たのではないのでしょうか。

大正十年に、十二才の幼いころ早くも、囚人が
働いていた官原炭にさがって働いたという人で、
いまも存命している方からは、「十二才の子でも
の自分でさへ日給六十何銭だったのに、囚人はた
った七銭じゃった」と語りますが、囚人の主食の
米麦半はんだったことはよくしるし、おかし
なことに目には見えませんが、一週間のうち
たった一度だけ魚の切れはしにありついたりとい
うほど、まずいものだったといえます。

ただし囚人たちはその服役ぶりにもとづいて表
彰を受け、表彰を受ける回数にもとづいて、一週
間に一回の魚が一回とか三回とかにふえるのでし
た。でも表彰をはかるに任じて、非情に加えられ
る懲罰の方がはげしかったのでした。現に、その
ころのことを物語る記録をめぐって見ますと、
「衣食の貸借ヲシタ者」や「書籍ヲモツテア
オギタル者」などどころか、「馬ノ尾ニテ指輪ヲ製
シタル者」までが「減食」という冷たい罰を加え
られているのです。

いかに重罪を負った囚人たちとはいえ、彼らを
がんにがらめにして包む、時の政府や三井独占資
本の圧制は、このように目を覆うばかりです。だ
から彼らが、三回、四回と暴動を起して反抗し
たのは当然なことでした。
とくに明治十六年の九月二十三日における大浦

炭での決起は、坑内をなめつくさんばかりの坑内
火災となって荒れ狂い、そのため大浦炭の出炭は
一年以上も途絶したほどだったのです。

しかし政府は、「火災ノ蔓延ヲ防グノ外策ナ
キヲモツテ」なお坑内の煙の中を逃げまどいてい
る良民坑夫二十一人、囚人二十四人、馬十三頭が
あることを百も承知の上で、「坑口ヲ密閉シタ」
ばかりか、暴動を起した囚人のうちのどれだけ
かは監守の竹槍で刺殺されたと伝えられている
のですから、ひどい仕打ちだったといえるばかり
ありません。彼らの怒りや反抗がどんなに深いもの
か、三井独占資本から囚人同様に搾取され、圧制
を受け、虫ケラのように取り扱われた囚人たちが炭
労働者には、ちよつとわがことのような思いで理
解できるのです。

政府や資本が、自分の経営する企業や手の中に
いる産業に囚人を使役したのには、何も三池炭鉱
だけにかぎったことではありませんでした。

政府は北海道に網走監獄を設けてここに囚人を
かき集め、そして開拓事業というこころから、つら
い労働に、囚人たちを狩りたてたこと、この
搾取手段はあらゆる資本がわがものにするこ
となり、一般の労働者さへも囚人同様に搾取しま
した。タコ部屋の名を、だれが忘れることができま
しょう。

九州では三井独占資本が、高島炭鉱などで囚人
を使役しました。ここでも一般労働者さへ囚人と
少しもかわらぬ圧制をもつて搾取され、監獄島と
呼ばれて恐れられたことを忘れることができま
せん。思えばわが国の独占資本は、囚人労働者
ばかりでなく、一般の労働者に対してさき経済的
強制を加えながら資本を蓄積し、いまの独占資本
としてそびえ立つことができたのだといえるで
しょう。

このような囚人労働も、昭和五年に廃止されて
以来その姿を消しましたが、三池では、いままで
かしく囚人たちの墓がのこっています。一の
浦の墓地にあるのはじめ、権現堂、大砂社宅
上、竜湖瀬など各地の草むらの中に点在してい
るのです。まだまだ、たくさんかくまわれているこ
とと思われませんが、私は彼らの遺骨をたずね歩いて
はおまいるのが常です。こぼれた、名もじ
るされぬ墓碑の前にひざまずいて耳を傾けますと
私にははるか遠い世界から呼びかけてくる囚人た
ちの怒りの声を、たしかに聞くことができるので
す。

皆さん、囚人労働のお話は果して昔むかしのお
話でしょうか。
(小崎文人記)